

ヘブル人への手紙10章19-39節 「投げ捨ててはいけない確信」

1A 新しい生ける道 19-25

1B 神への近づき 19-22

2B 希望と励まし 23-25

2A 故意の罪 26-31

1B 御子の否定 26-29

2B 神の裁き 30-31

3A 苦しみの中の忍耐 32-39

1B 苦しみを共にした日々 32-34

2B 忍耐による約束の相続 35-39

本文

ヘブル人への手紙 10 章を開いてください、午前礼拝で前半部分、1 節から 18 節まで見てきました。今から後半部分、19 節から学びます。ついに、私たちはヘブル書の山頂に上がりました。14 節に、「キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって永遠に完成されたからです。」これほど、偉大な恵みはありません！ご自身の血を流して、その肉体を、罪のためのいけにえとされて、そのことによって私たちを聖めて、永遠に完成されたのです！そして、私たちの罪と不法を、心の良心から清めてくださって、その罪をもはや思い出さないと宣言してくださっています。

1A 新しい生ける道 19-25

この高嶺にまで登ったので、次は下山です。つまり、どのようにして、この地上に生きている私たちが、この恵みに応答していくのか？ということでもあります。著者は、「何々、していこうではありませんか」と言って、応答を呼びかけています。初めに、22 節、「神に近づこうではありませんか？」です。次は 23 節、「しっかりと希望を告白し続けようではありませんか」です。そして 25 節、「ますます励もうではありませんか」です。

1B 神への近づき 19-22

¹⁹ こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。

10 章前半で、著者は、イエスの血は、牛や羊の血とは異なり、私たちから罪を取り除く力があることを教えました。神ご自身の独り子がからだを持ち、父のみこころを子が成し遂げたのです。そして、まことの天にある聖所に、ご自身の血を携えていかれました。ちょうど、地上の幕屋の中身を、すべて血によって清めるように、天の聖所はキリストご自身の血によって清められたのです。ですから、大胆に聖所に入ることができます。ロマ 5 章 2 節でも、パウロがこう書いています。「このキ

リストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」主の栄光の中に、そのまま入っていく恵みにあずかっているのです。

ここにある言葉で大事なのが、「大胆に」ということです。ギリシア語の「大胆」の元々の意味は、法廷において、被告になっているけれども、自分は無罪であることを知っているの、確信をもって宣言することができるときに使われるそうです。大祭司が年に一度、自分自身の罪のために流された血も携えて、それでかろうじて主の前に出ていました。さもなければ、主の前に自分の罪のゆえに打たれて死んでしまうからです。その恐れが、イエスの血によって全くないのです。主の愛が完全なので、私たちは自分の罪によって罰せられる恐れがありません。「Iヨハ4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」

²⁰ イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。

地上の幕屋にとって、垂れ幕こそが、神の御前に近づくことが完全にできていない状態を表していました。神殿があることによって、主が自分たちと共に住まわれていることを意識はできても、主ご自身のところには仕切りがあります。しかし、イエスご自身のからだに裂かれました。そのことにとって、垂れ幕も文字通り、裂かれたのです。主が死なれたら、地震が起こって、神殿の垂れ幕が、上から下に真っ二つに引き裂かれました。

そして、「この新しい生ける道を開いてくださいました」ということです。神に近づく道が、新しく開かれました。そして、それは生きる道です。神のいのちにあずかる道です。

²¹ また私たちには、神の家を治める、この偉大な祭司がおられるのですから、

私たちは3章で、モーセが神の家に仕えるしもべであったが、彼自身は神の家の一部でした。しかし、キリストは神の家の上におられる方です。神の御子として、家を治めておられることを学びました(2-6節)。

²² 心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。

血が振りかけられるのは、地上の幕屋では、その中にある祭具や祭司たちでありましたが、あくまでも、外側に対するものです。けれども、今は、御霊が注がれているので、キリストの血が私た

ちの心に振りかけられています。心にあるのは、「**邪悪な良心**」です。日本語で、この言葉を聞くと矛盾しているように聞こえます。良い心なのに、なぜ邪悪なのか？ということですね？けれども、元々のギリシア語には、そういった意味はありません。良心は、心の奥にある、善悪を測り知るものさしのような存在です。ゆえに、この部分がすっかり汚れてしまって、悪を捨てて善を選び取ることができなくなっているのです。善を行うことができないのです。しかし、そこをキリストの血潮が洗い清めてくださるのです。

そして、「**からだをきよい水で洗われ**」るとあります。これは、心に血が振りかけられて、良心が清められたことを、自分のからだをもって、神に対して、また人々の前に示すことを表しています。すなわち、水のバプテスマです。ペテロが第一の手紙で言いました、「3:21b **バプテスマは肉の汚れを取り除くものではありません。それはむしろ、健全な良心が神に対して行う誓約です。**」

そして、ここで大事なのは、神に近づくのですが、「**全き信仰をもって真心から**」とあることです。ヘブル人へ手紙、つまり、ユダヤ人の信者に対して著者が書いているのは、要は、彼らが、イエスに対する信仰が全きものとなるようにするというものです。イエスを信じたものの、激しい迫害があるので、信仰から距離を取っていました。それで、4章で著者は、エジプトから救い出されたものの、荒野で滅んだイスラエル人の例を取り上げていました。「4:2b **みことばが、聞いた人たちに信仰によって結びつけられなかったからです。**」とっていました。

苦しみに遭う時に、問題なのは、その苦しみに耐えられないことではありません。苦しみの中でも、神への道は開かれています。いや、苦しみにいる時こそ、主はご自分の民が近づく時に近づいてくださいます。「ヤコブ 4:8 **神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。**」神が近づいてくださるのです。預言者イザヤが、神の証しを立てている時に、強い圧迫を受けました。人々には聞こえが良いものではない、人気の出ないことを語らなければいけなかったのです。そこで、主は彼を励まされました。「イザヤ 8:13-14a **万軍の【主】、主を聖なる者とせよ。主こそ、あなたがたの恐れ。主こそ、あなたがたのおののき。そうすれば、主が聖所となる。**」主が聖所となる、つまり主がそこにおられることを、苦しみの中にいる時に、平素の時以上に知ることができるのです。問題は、この開かれた戸から、入ってこないことなのです。

2B 希望と励まし 23-25

ということで、神の御座に大胆に近づき、全き信仰で真心から近づくことが一つ目の勧めでした。次は二つ目です。

²³ 約束して下さった方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白し続けようではありませんか。

次は、「しっかりと希望を告白し続け」ることです。ヘブル書の著者が、アブラハムに対して、主がご自分に誓って約束されたことを取り上げたことを思い出してください。そして、その希望が、私たちが信仰から迷い出て、海でいつの間にか漂流してしまうように、流されてしまうことがない錨のような役割を果たすことを話しましたね。「6:19 私たちが持っているこの希望は、安全で確かな、たましいの錨のようなものであり、また幕の内側にまで入って行くものです。」

主が、約束されたことは必ずそのとおりになると信じて、待ち望むのですが、しかし困難が来ると、神が約束されたこととは全く逆のことが起こっているのではないか？という疑いが来てしまうのです。そして、ユダヤ人の信者たちは、その心の揺らぎを経験していました。それで、しっかりと希望を告白し続けようではないかと勧めています。みなさんは、いかがでしょうか？主を信じて生きているけれども、一向に、状況が前進しているようには見えないことがありますね。むしろ、悪化しているように見えます。自分の周囲を見ても、また社会や世界を見ても、気落ちしてしまうようなことがあります。けれども、主は必ずや、ご自分の約束を果たされます。

²⁴ また、愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。²⁵ ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合ひましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。

一つ目は、神に近づくこと。二つ目は、希望をしっかりと告白し続けること。そして三つ目が、励まし合うことです。これは、具体的にはどのような形で行われますか？そうです、主の御名によって集まる場所、教会です。だから、集まりをやめたりしないでと戒めています。

初めの、「注意を払おう」という言葉が、かなり強い言葉であります。事実、ギリシア語でも強い言葉です。強く言い合う、というぐらいの言葉なんですね。目的が大事です、「愛と善行を促す」ということです。私たちは、自然にしていると、互いに愛し合うということはおろそかになってきます。愛には、ここ本文にあるように、具体的に良い行いが伴います。口先だけでなく、真実と行いが伴います。しかし、互いに愛し合うことは、このようにしっかりと互いに言い合っていかなければ、どうしてもおろそかになっていって、その中で御霊の火が消えていってしまうのです。

先週の説教の中で、私は、孤独のことについて取り扱いました。それとなく付き合っていけばよいのだというところには、いのちがないことを話しました。人が造られたのは交わりのためであり、神と人との交わり、そして神にあって互いに交わり、一つになることが、神の願いであることを話しました。けれども、自分は神と交われればよいのだというだけで、イエス様の命じられた、互いに愛し合いなさいを実行しなければ、いつしか、その神との交わりでさえが、希薄になり、希望も信仰からも離れてしまいます。

みなさん、ぜひ、互いに連絡を取りましょう。そして、互いに祈りましょう。礼拝を献げることは大前提で、その後の分かち合い、交わり、そして、この場から離れても、互いに主にあってつながっていることを覚えましょう。メールやLINEで、みことばを分かち合っただけでもよいでしょう。対面で会って、みことばと祈りを覚えて交流することもよいでしょう。互いに、愛と善行を促すために注意を払っていくのです。

そして、「ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合ひましょ

う。」と言っていますね。ある人たちは、集まることをやめるという習慣があったようです。エルサレムにある神殿には行っているけれども、それ以外にイエスの御名によって集まることはやめているのです。それが習慣になっていました。まさに、今、日本においても、世界においても、キリスト者の中で起こっている大きな、深刻な問題です。日ごろの個人生活は送っているけれども、集まることを怠っているのが習慣化されたのです。コロナ渦になって、そうした動きがかなり定着しました。まさに、著者が戒めていることです。怠ってはいけません。今、ここに定期的にいらしている方々は、この問題はないので、むしろ、動画や音声、原稿で聞いている方々は、ご自身の生活を確かめてください。

集まって、私たちは何をしますか？「励まし合」うのです。教会というものが、何か正しいところ、間違いを犯さないようにするところだと、自分の考えを押し付ける人々がいます。励まし合うのではなく、裁き合っていくようになります。そんなところに、だれも来たくありません。励ますというのは、自分が困難にあって、がっかり来ているようなときでも、それでも主が共におられるのだよ。だから、主を見上げようということです。主が共におられるように感じられない時に、それでもおられることを知ることができるようにお手伝いすることです。

そして、「その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」と言っています。その日とは、キリストが再び来られる日のことです。この方が近づいているということは、二つのことが起こります。一つは、愛が冷えることです。イエス様は、オリーブ山のところで、世の終わりについて語られましたが、不法がはびこるので、人々がつまずき、愛が冷えることを語られました。このように、困難にますますなっていくます。だからこそ、私たちはますます励まし合うのです。

そしてもう一つは、主がすべてを救ってくださる日が近づいているということです。世が暗くなればなるほど、光が近づいています。ちょうど、山の頂上近づいているのに、深い木々で見えなくなって、暗くなってきた時に、「いや、まもなく頂上なのだ」と励まし合っていく必要がありますね。主が来られる時は、私たち信者の救いを完成される時です。そしてこの世界を、神の支配の中に導かれ、一新してくださる時です。だから、ますます励むのです。

終わりの日とは、この二つの流れが強くなります。ますます、愛が冷えて、つまずきが増えます。信じているとされている者たちが、実は信じていなかった、信仰から離れていったということが起こります。その反対に、終わりの日とは、ますます愛と善行を増し加え、光輝く時になります。これまで生ぬるかった自分が、目を覚まして、御霊に熱心になる時でもあるのです。

2A 故意の罪 26-31

このようにして、著者は、彼らがしっかりと主の中に堅く立っているように励ましています。けれども、それでも信仰から離れることの重大さについて気づかない人たちがいます。そこで、信仰から離れたら、いったいどんな大変なことになるのかを、はっきりと伝えます。脅しているのではなく、はっきりと伝えるのです。

たばこについて、その箱に書いている注意書きが、日本は遠回しの表現だということは有名ですね。「喫煙は、あなたにとって肺がんの原因の一つとなります。」「心筋梗塞の危険性を高めます。」「脳卒中の危険性を高めます。」とかいうものです。他の国では、そのまま「喫煙者は早死にする」と、そのまま単調直入に書いてあります！どちらでもよいのですが、要は、たばこを控えめにする、あるいはやめることをしてほしいのですね。著者も、励ましによって彼らが信仰から離れないのであれば、それでよしとしますが、時に、そのまま警告して、それで不信仰を悔い改めるようにしたいと願っています。

1B 御子の否定 26-29

²⁶ もし私たちが、真理の知識を受けた後、進んで罪にとどまり続けるなら、もはや罪のきよめのためにはいけにえは残されておらず、²⁷ ただ、さばきと、逆らう者たちを焼き尽くす激しい火を、恐れながら待つしかありません。

ここで著者が、「進んで罪にとどまり続ける」と言っているのは、ヘブル書の中では不信仰の罪です。「3:12-13 兄弟たち。あなたがたのうちに、不信仰な悪い心になって、生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。「今日」と言われている間、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされて頑なににならないようにしなさい。」救われるための知識そのものから、積極的に離れていくということです。

その時は、「もはや罪のきよめのためにはいけにえは残されておらず」とあります。私たちが、これまで見てきたとおり、キリストご自身が、終わりの時に献げられた、ただ一度の、罪のきよめのためのいけにえです。永遠の贖いをもたらす、いけにえです。この方こそが、究極の救いを備えてくださったのですから、この方を拒むのであれば、もはや、罪のきよめのためのいけにえは残されていないのです。そして、ここに書かれている通り、恐ろしい裁きを待つしかないのです。27 節に書かれている恐ろしい光景は、黙示録 20 章の最後に書かれています。「20:14 それから、死とよ

みは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。」

²⁸ モーセの律法を拒否する者は、二人または三人の証人のことばに基づいて、あわれみを受けることなく死ぬこととなります。²⁹ まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと見なし、恵みの御霊を侮る者は、いかに重い処罰に値するかが分かるでしょう。

モーセの律法において、申命記 17 章 6 節ですが、二人、三人の証言があつて、事実と確定されます。逆らう者がいる時に、それが事実であると確定したならば、石打ちによって殺さなければいけないという命令があります。ましてや、御子を否む罪を犯すならば、さらに重い処罰になるのか知れないということです。多くの人々は、旧約は、人への取り扱いが厳しく、新約は優しい、愛に満ちているという言い方をします。これは、大きな間違いです。むしろ、新約のほうが厳しいのです。確かに、主の救いは、全ての人に対して、永遠に至るものであり、新約において、神の寛容が究極の形で示されました。しかし、その究極の救いを拒むのであれば、旧約における人への処罰よりも、厳しい処罰が待っているのです。

信仰から離れるということは、どんなひどいことをしているかを、著者は、ユダヤ人に分かりやすく伝えています。一つは、「神の御子を踏みつけ」ることです。踏みつけるとは、聖なる所に、神を全く敬わない者たちが、どかどかと入り込んでくる様子です。(例: イザヤ 63:18) イエスが、神の御子であられることをあがめるのではなく、全く度外視し、拒んでしまうことです。次に、「自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと見なし」とあります。契約の血によって、どれだけ私たちが罪から清められるかを、私たちは学びました。それを、聖なるものではなく、むしろ汚れたものとみなしています。それから、「恵みの御霊を侮る」ことです。御霊によって、私たちは自分の義の行いではなく、神の憐れみによって清められ、救われました。その恵みを侮るのです。

このことが、一見、悪いことのように見えません。もし、ここでキリスト者であるのに、姦淫の罪を犯してしまった、殺人の罪を犯してしまったという人がいたとします。そして、キリスト者であると言っている人が、キリストは他のいろいろな救いの一つであり、仏であっても、いろいろ救いへの道はあるのだとする教えを受け入れたとします。あるいは、自分が道徳的に生きさえすれば、キリストだけに拘らなくてよいとします。もちろん、姦淫の罪や殺人の罪は深刻です。殺人の罪であれば、当然ながら、社会的に、法的に処罰も受けなければいけません。けれども、その人が真実に悔い改めているのであれば、どうでしょうか？その人は確実に罪が赦されており、救われています。けれども、キリストが救いなのではないとする人が、そのまま、人間的には悪いことをしないで生活し、そのまま死んだとしたらどうでしょうか？著者は、この後者の方を深刻に考えているのです。

2B 神の裁き 30-31

³⁰ 私たちは、「復讐はわたしのもの、わたしが報復する。」また、「主は御民をさばかれる」と言わ

れる方を知っています。³¹ 生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。

主は、一人一人の行いに報いられる方です。私たち人間の世界では、悪に対して、公正な裁きが行われていないのを見ます。人間ではどうすることもできない悪が、はびこっています。しかし、主は必ず報復されます。御子を踏みつけ、契約の血を汚れたものとみなし、恵みの御霊を侮るならば、その報いを受けるのです。それだけでなく、御民をさばかれるとあります。つまり、自分は信じているとしても、そこから離れるのであれば、御民であるからといって裁きを免れるのではないのだということです。

そして、神は生きておられます。人は神を拒む時に、自分の思いから神がいなくなったと思うからこそ、その後に平気に生きられます。しかし、神は生きておられ、御怒りを下されるということです。その恐ろしさについては、再び、黙示録の箇所を読みます。14章には、獣の国にいる住民が永遠に苦しむことを話しています。「14:10-11 その者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた、神の憤りのぶどう酒を飲み、聖なる御使いたちと子羊の前で火と硫黄によって苦しめられる。彼らの苦しみの煙は、世々限りなく立ち上る。獣とその像を拝む者たち、また、だれでも獣の名の刻印を受ける者には、昼も夜も安らぎがない。」

3A 苦しみの中の忍耐 32-39

そして著者は、再び励ましの言葉に戻っています。彼らを脅すことが目的ではなく、彼らが立ち返ることが目的だからです。

1B 苦しみを共にした日々 32-34

³² あなたがたは、光に照らされた後で苦難との厳しい戦いに耐えた、初めの日々を思い起こさない。

彼らは、キリストについての知識が、光として照らされた時、その初めの日々は、苦難との激しい戦いに耐えていたのです。初めの確信に満ちていたところから、その苦難に耐えきれなくなり、確信から離れつつあったという現状があります。

³³ 嘲られ、苦しい目にあわされ、見せ物にされたこともあれば、このような目にあった人たちの同志となったこともあります。

嘲られた人もいれば、見せ物にされた人たちもいます。人々の前で恥ずかしい思いをしていました。私たちキリスト者は、キリストにあって生きていれば、人々の前で恥ずかしい思いをすることができます。しかし、そうしたことから退くのではなく、むしろキリストと同じ辱めを受けたとして、自分は正しいところにいるのだと確認することができます。

そして、ここですばらしいのは、「このような目にあつた人たちの同志となつた」とあるところです。自分が、そうした人々といっしょになりさえしなければ、火の粉は自分に降りかかりません。しかし、それでもあえて、自分は彼らの仲間であることを公言して憚らなかつたのです。

³⁴ あなたがたは、牢につながれている人々と苦しみをともし、また、自分たちにはもつとすぐれた、いつまでも残る財産があることを知っていたので、自分の財産が奪われても、それを喜んで受け入れました。

牢につながれている人と自分を共にしたら、自分自身も罪に問われることとなります。それでも、かまわないとしました。それから、牢に入れられるような刑罰だけではなく、職を失うという経済的な迫害もあります。売り買いができなくさせられることもあります。そして財産没収ということもあります。けれども、永遠の富が与えられているのです。

2B 忍耐による約束の相続 35-39

³⁵ ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはいけません。その確信には大きな報いがあります。

ヘブル書において、著者が問題にしていたのは、確信を彼らが投げ捨ててしまいそうになっていたことです。確信を初めに抱いていたのに、途中であきらめてしまったことです。最後まで保ちさえすれば、大きな報いがあります。教会で信仰を持ち、バプテスマを受けた人々が、どれだけその信仰を保ってきたでしょうか？今も信仰を保っている人たちもいれば、そうでない人たちもいます。途中で投げ捨てないでほしいということです。

³⁶ あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは、忍耐です。

ここで、忍耐です。試練の時には、忍耐を働かせます。神がおられるように思えない時でも、おられることを信じるのです。信仰を、忍耐をもって働かせていけば、必ずや約束のものを手に入れることができるのです。

³⁷「もうしばらくすれば、来たるべき方が来られる。遅れることはない。³⁸ わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。」

これは、ハバククの預言から来たものです。私たちは、ロマ書 1 章において、この箇所をパウロが引用して、それで信仰による義を教わります。けれども、そこは、約束を実現される方が来られるけれども、遅れることはないから信じていなさいという勧めの中で語っていることなのです。忍耐を働かせて、神が遅れているように見えている時でもそれでも信じるということです。

³⁹しかし私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。

信じることの反対は、恐れ退くことです。人を恐れて、神を信じるところから退くことです。私たちはいつも、この戦いにいます。人を恐れる、物事を恐れる、そういった恐れが来ると、そこで神に信頼するのではなく、他のものに頼るようになります。それは、自らを滅びに向かわせる罠に陥るしかなくなるのです。そうではなく、信じます。そうすれば、確かに永遠のいのちに至るのです。いのちを保つことができます。

そこで、今回は 11 章に進みます。信仰の勇士たちの証しです。ユダヤ人の兄弟たちは、全き信仰から離れて、恐れ退いていました。けれども、旧約の時代の聖徒たちは、信仰に満ちていました。すべてのことは信仰によって成り立っていることを、過去の模範を通して教えていくのです。